



たくさん失敗しましょう

今年の夏休みも暑かったですね。大阪では酷暑日こそなかったものの、体温を上回る日が続き、いまだに猛暑日の毎日です。「暑さ寒さも彼岸まで」とよく言いますが、あと一か月近くもあるのかと思うと、待ち遠しくて仕方ありません。2学期が始まり、子どもたちにとっては、暑さへの慣れだけでなく生活習慣を学校バージョンに戻す必要もあり、夏休み明けの一週間が一番しんどいと思います。まずは、体調を第一に考えながら、少しずつペースをつかんでほしいです。

さて、一年間に3つある学期をホップ・ステップ・ジャンプの三段跳びに例えると、2学期は、ジャンプの前のステップになります。3月の学年末に大きく跳ぶためにも、この2歩目をしっかり踏み込むことが必要です。そして、その2歩目となる2学期の始業式で、私は子どもたちに、「たくさん失敗しましょう」と話しました。そう言われた子どもたちは、きっと驚いたと思います。それはそうでしょうね。校長先生が、失敗することを呼びかけたのですから。

私は、なぜ失敗しようと言ったのでしょうか。もちろん、最初からわざと失敗するようなことをしてほしいわけではありません。また、いつもきちんとできているのに、たまたまうっかりして失敗するのも、ちょっともったいないのでこれも違います。私の言う「失敗」には、その前に「挑戦」があります。挑戦を成功させるためにも、あえて私は、「失敗しましょう」と言ったのです。例えば、今までやったことのない係や役割に立候補してみることや、苦手な学習に自分から取り組んでみるなど、小さなことでもよいので、まずやってみることから始めてほしいと思います。でも、すべてがうまくいくとは限りません。挑戦には失敗がつきものなのです。

天王寺小学校の子どもたちは、とても素直で真面目な子が多いです。しかし、一方で、ちょっと指示を待ってしまったり、なかなか一歩が踏み出せなかったりする子がいます。私は、そんな子の中に、間違いや失敗することを恐れている子が、案外いるのではないかと考えました。

そこで、以前、児童朝会の校長講話で、^{まさたしんじ}蒔田晋治さん作の『教室はまちがうところだ』という絵本を読み聞かせたことを思い出しました。この詩は、「教室はまちがうところだ／みんなどしど



し手をあげて／まちがった意見を言おうじゃないか／まちがった答えを言おうじゃないか」という書き出しで始まっています。本来ならば、教室は正しい答えを見つける場所なはずなのですが、それと真逆なことを伝えることで、教室が子どもたちの失敗への不安や恥ずかしい気持ちをおおらかに受け止めてくれる場所であることを伝えてくれています。それと同じ思いで、「失敗しましょう」と呼びかけたのです。

私たち大人にしても同じです。つい子どもたちを「失敗」させないように導いてしまう時はないでしょうか。子どもが安心してすくすく成長することは大事ですが、死ぬまで一度も^{つまず}躓かずに歩くことが不可能なように、人生で失敗を避けて通ることはできません。でも、成功して自信をつけることだけが成長する方法だと勘違いしてしまうと、試練の先にある成長よりも、今の居心地の良さを優先してしまうのです。それでは、子どもが、将来困難や挫折に出会った時、もう一度立ち向かう力を身に付ける機会を失うことになってしまうのではないのでしょうか。

学校は、子どもたちが成功だけでなく、失敗も重ねて成長する場所です。そして、そのためにも学校は、失敗しても大丈夫だと思える安心な場所でなければならないと考えています。

さて、今学期、天王寺小学校の子どもたちは、どんな失敗を成長に変えてくれるのでしょうか。皆様のご理解とご協力を賜りますよう、どうぞよろしくお願いいたします。

夏の学び

授業のない夏休みは、教職員にとって絶好の研修期間です。本校の先生たちは、いろいろな研究会や研修会に参加していましたが、私も、この夏たくさんの学びと出会いました。

そんな中、京都で開かれたある研究会で、妙心寺の僧侶^{そうりょ}による講演を聞く機会がありました。AI時代と言われる現代社会における生き方について、仏教の視点からのお話です。

その話の中で、なるほどと思ったのが、「近ごろウェルビーイング（よく生きること）が盛んに言われるが、それは、今がよく生きられていないからではないか」と言われたことです。確かに日本人は幸福度が低いと言われているのも納得の一言です。そして、その理由の一つとして、「比較バイアスやコスパ・タイパなどの効率化」を述べられました。例えば、SNS でよく使われる「^ば映える」という言葉は、比較を通してつながっている象徴でしょう。その結果、「必要だから頑張るのではなく、他者と比較して不安だから頑張る世の中になっている」とおっしゃっていました。

では、私たちは、そうした時代をどのように生きていけばよいのでしょうか。僧侶は、比較にとらわれない生き方に必要なものとして、「^{ち そく}知足」（足るを知る、自身や家族の健康など比較社会で見えないものを知ること）や「自由」（人によるべきならず、自らにゆだねる）などの仏教用語に加えて、「先生」を挙げられました。ここで言う先生とは教員のことでなく、もっと広い意味です。先生という存在が、人が生きる上での道標となるだけでなく、先生にも先生が必要であるということです。

この講演を聞いた後、「さて私の先生とは誰だろう？」と考えると、ものすごくたくさんの方が浮かんできてしまいました。逆に「私は、誰かの先生になっているのだろうか？」と考えたのですが、誰も思い浮かびはしません。結局、私の人生も、まだまだ道半ば^{なか}だなあと再認識した夏の学びでした。

